



~いよっ! 待ちました~

幻の朝顔「団十郎」が《入谷朝顔市》で復活

毎年、7月6日から8日の3日間開催される入谷朝顔市では、赤（桃）、青、白色など鮮やかな朝顔が、入谷鬼子母神（真源寺）周辺の道路を埋め尽くします。「行灯仕立て」された大輪朝顔だけではなく、桔梗咲き、琉球朝顔、西洋朝顔、夕顔などの多様なアサガオの仲間が江戸情緒を演出します（23年度の入谷朝顔市は中止です）。

江戸川区内の生産者は、朝顔市に向けて、毎年10万鉢を生産しています。かつて、栽培が盛んであった「団十郎」は、種子の確保が難しく生産量が激減していました。そのため、“幻の朝顔”とも言われ、類似品種が「団十郎」として販売されていることもありました。

そこで江戸川分場では、生産が激減した正統「団十郎」を蘇らせることを目的に、平成19年に正統な「団十郎」3鉢を採種用親株として入手・育成し、翌年には交雑性の有無を確認するとともに、特徴ある形質（花色、葉色）の継続性を確認しました。平成21年には2,000粒を超える種子を確保し、平成22年には入谷朝顔市で試験販売も行いました。

3年の歳月を費やし復活させた「団十郎」は、葉色が淡く花は大輪で花色がえび茶色といった珍しい花色が特徴です。

(江戸川分場)



他品種に比べ明るい黄緑色の葉色

農機・資材検討会(展示会)のお知らせ

毎年好評の都野連主催、JA全農東京共催の

「農機・資材検討会(展示会)」が、

8月4日(木)～5日(金)の両日開催されます。

当日は、トラクター、耕耘機、防除機、農薬をはじめ、各種の農機・資材が展示されますので、ご自由に見学してください。

開催場所：立川庁舎 多目的広場

開催時間：9～16時（5日は15時半まで）



～赤、緑、バラエティー豊富！～ 新しいブドウを紹介します

都内におけるブドウ栽培は施設化が進み、品種も多様化し、新たな品種に挑戦するブドウ生産者が多くなりました。直売所等においても、バラエティー豊かな色とりどりのブドウが販売され、消費者の皆様には喜ばれています。そこで、近年、出願登録されたブドウ新品種の都内における特性を紹介します。(園芸技術科)

「サンヴェルデ」

(「ダークリッジ」×「センテナール」)
出願登録：2010年 (独)農研機構果樹研究所

都内における収穫期は9月上旬。皮表色は鮮やかな黄緑色です。果房重430g程度、果粒重11g程度になります。果実品質は糖度が20%前後と高く、酸度は低いです。



渋味がなく皮ごと食べられ、食味に優れます。皮表色が黄緑色の種なしブドウとしての販売拡大が期待できます。日当たりを良くし、花がら除去の徹底により高品質の果実生産が可能です。

「クイーンニーナ」

(「安芸クイーン」×「安芸津20号」(紅瑞宝×白峰))
出願登録：2009年 (独)農研機構果樹研究所

都内における収穫期は9月下旬。皮表色は鮮やかな赤色です。果房重600g程度、果粒重も20g程度まで肥大する大粒種です。果実品質は糖度が20%前後と高く、酸度はやや低いです。



しまった果肉で、食べやすい種なしブドウになります。葉枚数を確保し、大房にしない房づくりの徹底と、直光着色性のため、日当たりを良くすることで、糖度が高く着色の優れた品質の高い果実生産が可能です。

～カイガラムシの防除適期～

今年の春から初夏にかけて発生の目立ったカイガラムシ類

病害・虫害管理チームでは植物の病気や害虫を調べ、その対策を研究しています。このことから、病害虫についての相談が多く寄せられますが、今年は植木や果樹などでカイガラムシの発生が目立っているようです。カイガラムシの多くの種では、5～6月にかけて卵がふ化し、1回脱皮した後に餌となる植物に口針を差し込んで樹液を吸います。そして、多くは成長が進むと一定の場所に固着し移動しなくなります。また、体表からロウ物質を分泌して体を覆うため、殺虫剤などが虫体に達しにくくなり防除が困難になります。

一般には、カイガラムシの駆除は冬期にマシン油などの薬剤を散布しますが、効果的に駆除するためには防御力の弱い幼虫が歩き回る春から初夏の時期が防除適期となりますので、今後の対策の参考にしてください。(生産環境科)



サカキに発生した
ルビーロウムシ



ソヨゴに発生した
ツノロウムシ



マンサクに発生した
ヒモワタカイガラムシ

～街路の緑が黄色に?～

ツツジの葉に黄化症状が出ています

東京都の市街地には、緑化の目的で多くのツツジ類などの街路樹が幹線道路沿いに植えられおり、人々の目を楽しませています。しかし、一部のツツジ類で葉が黄化する等の問題が発生しています(図1)。

この問題は名古屋市や大阪市でも報告されており、その原因の1つとして植栽用土の土壌pHがあげられています。土壌pHが7に近くなると低pH(pH4~5)を好むオオムラサキツツジなどのツツジ類は土壌からうまく栄養が吸えなくなり、葉が黄色くなってしまいます。

土壌肥料研究チームでは、都内幹線道路沿いの植栽用土の土壌pHを調査した結果、いくつかの地点で土壌pHが高いことを確認しました(図2)。土壌pHがなぜ高いのか、原因はまだ明らかにされていませんが、健全な街路樹が増えるよう原因解明と対策に取り組んでいきます。

(生産環境科)



図1 ツツジの黄化症状

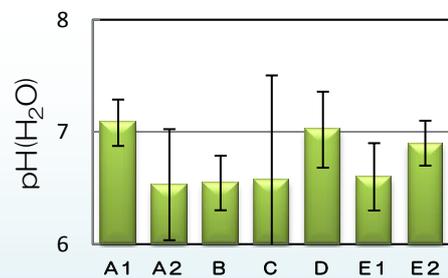


図2 都内幹線道路沿い植栽用土の土壌pH

～香りシクラメンシリーズ 第3弾～

新たに品種登録された「はる香ミディ」です



当センターで育成した新しいシクラメンの品種「はる香ミディ」が、平成23年1月13日付けで、品種登録されました。

これまでに発表してきた「さわや香ミディ」、「おだや香」に続く“香りシクラメンシリーズ”第3弾になります。

シクラメンの栽培品種は通常、花は大きく鮮やかですが、ほとんど香りがありません。今回の「はる香ミディ」は、シクラメンの原種で香りの強い *Cyclamen purpurascens* と栽培品種の交配種で、花は香気成分(ジヒドロファルネソール, シトロネロールなど)を持ち、さわやかなウッディフローラルな香りを放ちます。小～中輪の大きさで、明るいピンク地に濃いピンク色の覆輪が入り、花卉の縁にレースのようなフリンジを持つため、見た目も大変愛らしい花です。



「はる香ミディ」(手前)

初秋から連続してたくさんの花を咲かせるので長く楽しめます。皆様どうぞ“香りシクラメンシリーズ”3部作を末永く可愛がってください!

(園芸技術科)

～作業道・ニホンジカ・間伐～

森林・林業関係研究発表会を開催しました

緑化森林科では、森林・林業の関係者並びに森林・林業に興味の持つ都民の方々に向けて、毎年日の出庁舎で「森林・林業研究発表会」を開催しています。

今年度は5月26日に「多摩地域における作業道の特徴」、「間伐するとどのような植物が芽生えてくるのか?」、「多摩の森林における栄養学的にみたシカの生息可能頭数」の3課題について発表しました。

当日は、森林所有者など多くの方が参加されました。参加者からは、地形と芽生えとの関係やシカが食害する樹種などについて活発な意見や質問があり、盛況な発表会になりました。



(緑化森林科)

ニホンジカと会場の様子

平成23年度の新規研究課題の紹介

(前号に続き、当センターで今年度から新たに取り組んでいる研究についてご紹介します)

生産環境科

○近紫外線除去フィルム下でのトマトにおける農薬残留特性の解明

資材利用下でのトマトの主要農薬残留特性を明らかにし、都内農産物の安全性を追求します。

○園芸作物におけるウイルス性病害の発生実態解明と防除対策の確立

東京都における園芸作物のウイルス性病害の発生実態を解明して、広域的な蔓延を事前に防止するとともに、的確な防除対策を構築します。

○ブルーベリー種間雑種育成系統の肥料吸収特性の解析

東京で育成された種間雑種育成系統の肥料吸収特性を既存品種と比較しながら明らかにし、品種導入時の施肥管理の指標とします。

○発泡ガラスが吸着した下水処理水中残存リンの有効活用

産業技術研究センターと共同研究を行い、下水処理水に残存するリンを発泡ガラスにより効率よく吸着・回収・肥料化することを目指し、当センターでは下水処理水から発泡体によって吸着・溶離したリンの肥料効果を明らかにします。

畜産技術科

○乳質改善による東京牛乳のブランド力強化対策

東京牛乳の原料乳の大部分をまかなう検定農家の乳質改善により、良質な東京牛乳の安定的供給を通じて都民の食の安全安心、地産地消を推進することで、東京牛乳のブランド力の強化を図ります。

○トウキョウXの遺伝資源保存のための精液凍結技術の改良

従来の種豚の精液凍結保存手法について改良し、活力や生存性の高い凍結精液作成方法を確立すると同時に凍結精液ストックを充実させ、遺伝子を保存します。

○畜産排水の下水処理における希釈水削減技術開発

畜産排水の下水放流処理方式の問題解決策を探ります。

(研究企画室)

(発行者)東京都農林総合研究センター 保科次雄

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 東京都農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町 3-8-1 TEL 042-528-5216 FAX 042-523-4285

<http://www.tokyo-aff.or.jp/center/index.html> 皆様からのご意見・ご質問・ご要望をお待ちしております。